水の都・大阪の歴史と命の能「水の輪」

「大坂名所一覧」より
五雲亭 貞秀 / 画
大阪市立図書館デジタルアーカイブより

企画・制作　公益財団法人 山本能楽堂
助成　日本財団「海と日本プロジェクト」

はじめに

大阪は世界的にもまれな「ロの字型」の水の回廊を持つ水の都です。難波津の時代から始まり、「天下の台所」と呼ばれた江戸時代、そして「東洋のマンチェスター」と呼ばれ、世界一の繁栄を遂げた近代に至るまで、大阪は、長い歴史の中で、水の恩恵を受けて育まれて、繁栄をとげてきました。この大切な大阪の美しい水を次の時代に伝えていくため、私たちはどうすればよいのか、川の歴史と一緒にみんなで考えてみましょう。

目次

川の歴史 P2

水の回廊／海から生まれた大阪
難波津／八十島祭
天神祭／水上交易の中心都市
なにわ八百八橋
治水対策／川に背を向けた戦後
水都の再生へ

今抱えている問題 P8

プール3杯分のごみ
わたしたちはプラスチックを食べている?
わたしたちができること

命の能「水の輪」の取り組み P11

能「水の輪」とは
あらすじ
「水の輪」のあゆみ

大川と八軒家浜

水の回廊

かつて大阪は、水運に支えられ、経済と文化の中心都市として発展し、明治時代には“水の都”と呼ばれていました。世界の「水都」として名高い都市は、アムステルダム（オランダ）、ベネチア（イタリア）、ストックホルム（スウェーデン）、蘇州（中国）などがあり、また大阪の中之島はパリの中心部を流れるセーヌ川のシテ島に例えられることもあります。

大阪市の中心部を流れる堂島川・土佐堀川・木津川・道頓堀川・東横堀川が「ロ」の字をかたち作っていることから「水の回廊」とも呼ばれています。大阪市内の河川の面積は20.5㎢で、これは市域面積約220㎢の約1割にもなります。琵琶湖から京都を経て大阪に流れ込み、大阪湾に流れ出る川の水は、多くの人と生き物、自然を支えてきました。その歴史を見ていきましょう。

海から生まれた大阪

太古（縄文時代）の大阪は、海の下にありました。現在の大阪市の中心部は海の底であり、わずかに上町台地が半島のように陸上に顔を出すのみで、その東には河内湾と呼ばれる入江が広がっていました。大阪市内でいくつもクジラの化石が発掘されていることが、かつてはクジラが泳ぐ海だった証拠です。

古墳時代になると、淀川が運ぶ土砂が河口に堆積して湾の入口をほぼ塞いでしまい、さらに川の水が流れ込み、巨大な淡水湖に形を変えました。水害を受けやすい地形であったため、日本書紀には大規模な治水・利水事業が行われた記録があり、人々が暮らしやすい土地を求めて地形を改良していたと考えられています。

河内湾（約6000～7000年前）

河内湖（約1600～1800年前）

河内平野（5世紀以降）

出典：水都大阪ホームページ

難波津

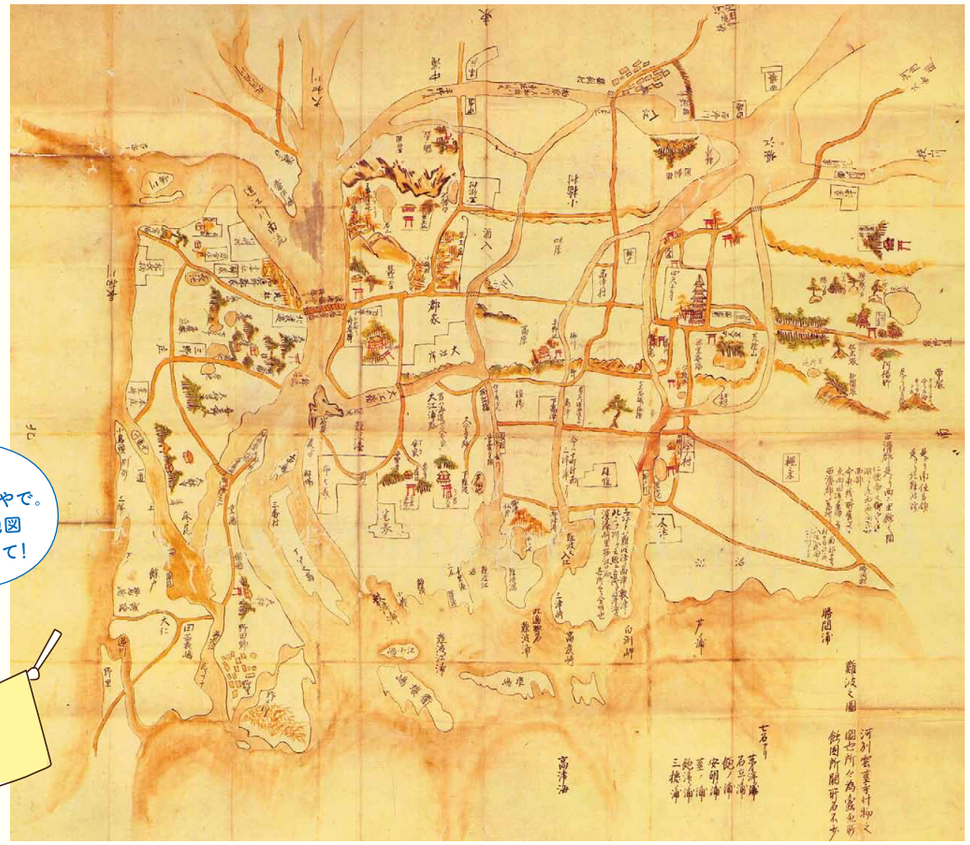
大阪湾には古くから数多くの津（船着き場や港）が存在しました。上町台地の北端にあった難波津（なにわづ）は、古代の重要な港でした。難波津の正確な位置については、中央区三津寺町付近とする説と、中央区高麗橋付近とする説などがあります。難波津は、遣隋使、遣唐使など使節往来の拠点として発展した古代日本の玄関口です。

大化の改新（645年）の後、現在の中央区法円坂周辺に難波宮（なにわのみや）が置かれ、それから約150年間、京都や奈良とつながり首都あるいは副都としての役割を果たしました。

難波宮跡公園　©（公財）大阪観光局

八十島祭

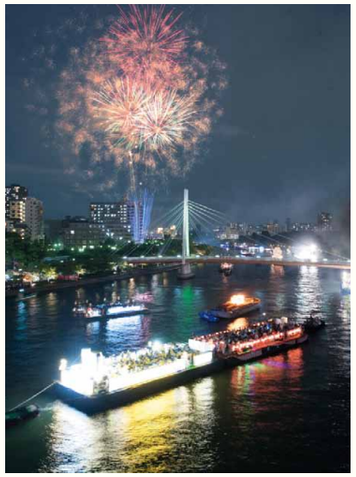
平安時代から鎌倉時代にかけて、新たな天皇が即位する時には難波津にて「八十島（やそしま）祭」が行われました。八十島祭は、なにわの地にある大小多数の島々を日本の国土全体に見立てた儀式です。現在でも大阪には、中之島・堂島・福島など、「島」のつく地名がたくさんあります。後世になって中世以前の大阪を想像して描いたと言われる「難波往古図（なにわおうこず）」を見ると、たくさんの島があった様子がわかります。



「難波往古図」　大阪市立図書館デジタルアーカイブより

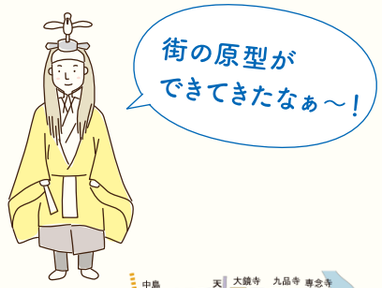
天神祭

平安時代の天暦3年（949年）に大阪天満宮が建立され、その翌々年に天神祭が生まれました。社頭の浜から神鉾を流し、流れついた浜辺に斎場を設け、禊祓い（みそぎはらい）を行ないました。その折、神領民が船を仕立てて奉迎したのが天神祭の始まりとされ、一千年の歴史を誇っています。



天神祭　©（公財）大阪観光局

水上交易の中心都市



奈良、京都と幾度も都が移っていましたが、戦国期になると豊臣秀吉は大阪を首都にする構想を抱え、都市開発に着手しました。大阪城の築城と平行して、街路を整備し水路を築き、整然とした城下町を造り上げたのです。

堀川を掘った土は両側に盛られ新たな土地となり、堀川沿いに次々と新しい街が生み出されていきました。縦横無尽に広がる堀川は大阪の物流の動脈として「天下の台所」を支える重要な役割を担っていました。

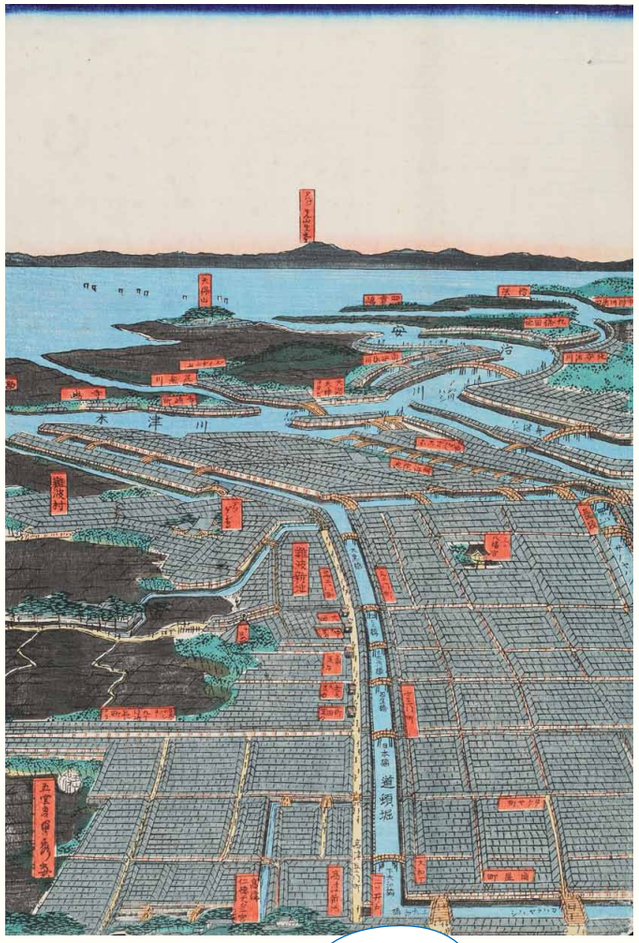
東横堀川と 西横堀川が南で堀留めになっていたため、これを東西につないで木津川へ流し、淀川の水が大量に流れるようになって城下町の衛生状況は良くなりました。また、私財を投じて開墾に尽力した安井道頓の功績を認めて「道頓堀川」という名前にし、川沿いの新たな敷地に芝居小屋などの営業を許可しました。これが現在のミナミ界隈の繁栄につながっています。

出典：水都大阪ホームページ

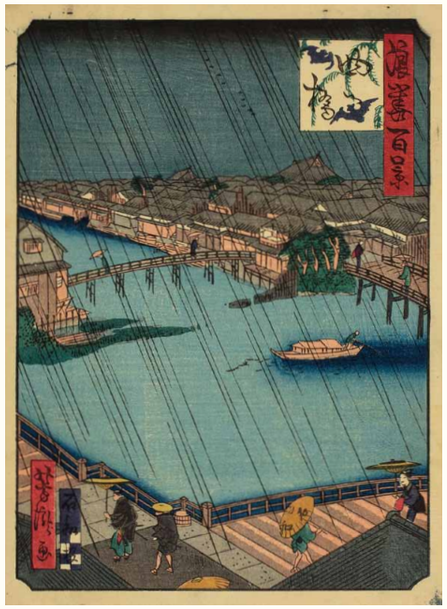
なにわ八百八橋

多くの堀川の開削を経て、「なにわ八百八橋」と呼ばれるほど多くの橋が架けられました。（実際には、江戸時代の市内の橋の数は200程度であったとされます。）これらの橋のうち、幕府によって作られた「公儀橋」はわずか12橋だけで、それ以外は有力な商人や近隣の町々が出資して架けた「町橋」でした。人々が自ら支え、暮らしに橋が溶け込んでいたことがわかります。

現在は多くの堀川が消え、それに伴い橋もなくなっていきましたが、心斎橋や四つ橋、長堀橋などの地名に現在も多く残っているとともに、橋のあった近くには往時をしのぶ碑が建てられています。



「大坂名所一覧」より
五雲亭 貞秀 / 画
大阪市立図書館デジタルアーカイブより



四ツ橋（浪花百景）
里の家芳瀧 / 画　大阪市立図書館デジタルアーカイブより

現在の四ツ橋跡

治水対策

淀川の河口にある大坂は、常に淀川の洪水に悩まされてきましたが、延宝2年（1674年）の大洪水を受けて、ついに幕府が対策に動きます。貞享元年（1684年）、河村瑞賢は淀川河口に立ち塞がっていた九条島を開削し、曲がりくねった河川を直線的な河道とする約3kmの新しい川、安治川を造りました。

安治川開削の後、元禄17年（1704年）、中甚兵衛らの長年にわたる幕府への訴えが実り、大和川の付け替えが行われました。これにより淀川から大和川が切り離され大阪平野の洪水被害は減少しました。

大橋房太郎

明治18年（1885年）には淀川大洪水が発生しました。大橋房太郎は東京で鳩山和夫氏の書生をしていた時、これを知り急遽帰阪し、村長や府議になり奔走しました。私財を投げうち、知事や貴族院議員、当時総裁であった伊藤博文や松方正義などに淀川改修を求める陳情を繰り返し、明治29年（1896年）、帝国議会で国家プロジェクトとして河川法が制定され、淀川改修を実施することが議決されました。1番の難関は新淀川の為の用地買収でした。約3000人の地主に治水の大切さを説いて回りました。『子孫のために今、治水をしなければならない』と説いていく房太郎の熱意に皆の心は次第にとけていきこの大事業は完遂されました。

改良工事で誕生した新しい淀川
出典：国土交通省 淀川河川事務所ホームページ

川に背を向けた戦後

第二次世界大戦後、急速な経済発展に伴う地下水汲み上げにより、もともと低地だった大阪の地盤はさらに低下したため、度重なる水害に遭ってきた沿岸部の高潮対策として、防潮堤が築かれました。これによって水害対策は実現できたものの、無機質なコンクリートの護岸が水辺と陸を分断し、人々は川との接点を失うことになります。

また、運搬の主流が鉄道や車に移ると共に役割を失いつつあった堀川が次々と埋め立てられて道路となり、もしくは高速道路に覆われ、水都としての姿を消失させていきました。

やがて、高度経済成長とともに急速に拡大した経済活動と人口増加に伴う生活排水や工場排水により水質は悪化し、人々は水辺から顔を背けるようになってしまいました。

現在の阪神高速道路と東横堀川

水都の再生へ

戦災復興から経済成長へと急激に進み下水道整備も間に合わず、昭和70年代になると、川は工場や過程排水でひどい悪臭を放つほどに水質が悪くなりました。大阪市は河川・水道・下水道・港湾・環境事業など関連部局が一体となって、川や海の水質浄化に取り組むことになります。

川底のヘドロを浚渫する船を建造、東横堀川に浄化水門の設置、道頓堀川にエアレーション（噴水）設置など、水質を浄化する河川施設の整備を行い、また上下水道の拡張整備が進められた結果、昭和54年（1979年）には東横堀川でBOD（生物化学的酸素要求量）3～4mg/lと基準値を下回り、大阪はきれいな川を取り戻しました。その後、水質向上の時代へ移っていきます。

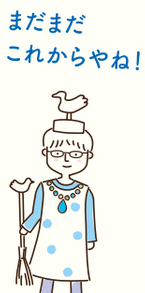
八軒屋夕景（浪花百景）
歌川國員 / 画　大阪市立図書館デジタルアーカイブより

水辺の都市としてのルーツを見つめ直し、海や川が育んだ街大阪を、今一度、“水都”として再生しようと、にぎわいのある水辺の拠点整備が進められるなか、水都大阪の復興を広く伝えるとともに、市民が主役となる、元気で美しい大阪づくりをめざし、2009年、「水都大阪2009」がシンボルイベントとして開催されました。親水性の高い中之島公園や水の回廊を中心とした市内各所において、体験型アートプログラムやワークショップ、灯りで会場を埋め尽くすプロジェクト、アート舟の巡航や橋梁ライトアップ、船着場での朝市やリバーマーケット、近代建築はじめ川や橋梁などを巡る水都アート回廊、舟と水辺を組み込んだまちあるきなど、川と人をつなぎ、水辺の楽しさを再発見できるさまざまなプログラムが展開されました。

八軒家浜大階段　©水都大阪コンソーシアム

道頓堀・浮庭橋・クルーズ　©水都大阪コンソーシアム

水都大阪2009を契機として育まれたネットワークや新しい仕組みを今後につなげ、人間活動の場としての川を礎に美しい水都大阪を新たに築いていく取り組みを継続させようと、大阪府、大阪市、経済界に市民やNPO等が加わり、水都大阪を推進する新たな活動が広がっています。



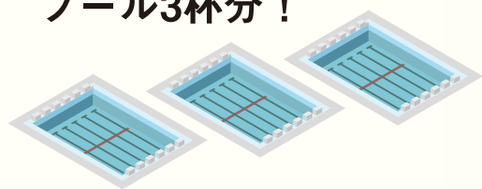
プール3杯分のごみ

水辺はキレイになったように思えますが、大阪府域から大阪湾に流入するプラスチックごみの量は、

容積：1,032㎥/年間
重量：58.8ｔ/年間

と推計されました。この容量は、標準的な小学校用の25mプール（幅12m×長さ25m×深さ1.2m）の約3杯分に相当します。
（大阪府ホームページより・2021年度推計）

プール3杯分！



大阪府 海ごみ対策啓発ポスター

大阪府では、令和3年（2021年）に「おおさか海ごみゼロプラン」を策定し、大阪湾に流入するプラスチックごみの量を、現状を100として、2030年度に半減するという目標を掲げ、ごみを出さないライフスタイルの定着など発生抑制対策や地域団体等による美化活動の活性化等の取組みを推進しています。

わたしたちはプラスチックを食べている？

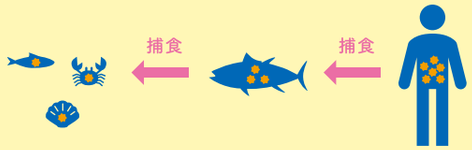
プラスチックごみを食べているのは野生生物たちだけではありません。WWF（世界自然保護基金）の発表によれば、私たち人間は、

1週間で クレジットカード1枚分（約5g）
1年で ヘルメット1個分（約248g）

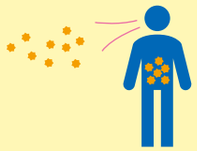
のプラスチックを知らない間に食べているそうです。
「プラスチックを食べている」と聞いても、いまいちピンと来ないと思いますが、魚の胃の中から大量のマイクロプラスチック（※）が発見される事例が世界各地で報告されています。わたしたちがその魚を食べたとしたら…

※マイクロプラスチックとは
5mm以下の微細なプラスチックごみのことです。マイクロプラスチックには、プラスチック製のごみが紫外線や波の力で細かく砕かれたものや、一部の洗顔料や歯磨き粉のスクラブ材などに利用されているマイクロビーズなどがあります。
マイクロプラスチックはスポンジのように有害物質を表面に吸着させる特徴があり、海の生き物が餌と間違えて食べることで、吸着した化学物質が取り込まれ、食物連鎖を経て、生態系に影響を与えることが懸念されています。

海洋マイクロプラスチックを、
海鳥や小魚がプランクトンや
餌と勘違いし食べてしまい、
食物連鎖の上位にいる大きな魚や動物、
そして私たち人間がそれらを食べる



空気中にも漂っているマイクロプラスチックを
呼吸で吸い込んでしまう



すでに環境に流出してしまったマイクロプラスチックと、これから流出する分を削減するために、私たち一人一人ができることとは何でしょうか？

わたしたちができること

私たち一人一人ができること

外で出たごみは家に持ち帰る、
または決められた場所で処分する

毎日の暮らしのなかで
できるだけごみを出さないようにする

河川や海岸などの清掃活動に
積極的に参加してみましょう

海に囲まれている日本。
魚よりごみの量が多くなる日が訪れる前に、私たち一人ひとりができることから始めてみましょう。
みんなの意識が変われば、豊かで美しい海を未来に引き継げるはずです。

CHANGE FOR THE BLUEとは

日本財団 海と日本PROJECT　CHANGE FOR THE BLUE 海の未来を変える挑戦

国民一人ひとりが海洋ごみの問題を自分ごと化し、"これ以上、海にごみを出さない"という社会全体の意識を向上させていくことを目標に、日本財団「海と日本プロジェクト」が推進しているプロジェクトです。海の豊かさを守り、海にごみを出さないという強い意思で日本全体が連帯し、海に関心を持つ人を増やし、海の未来を変える挑戦を実現していきます。

海と日本PROJECTが推進する 5つのアクション

5つのアクションを起こすことで、このプロジェクトが多くの人の目に留まり、
社会全体に浸透していくことを目指しています。

海を学ぼう！　海をキレイにしよう！　海を味わおう！　海を体験しよう！　海を表現しよう！

命の能「水の輪」とは

Noh for SDGs

日本の伝統芸能である能の力で、持続可能な社会の実現を目指す

能「水の輪」は、子どもたちが水鳥になって汚れてしまった川を美しくよみがえらせる

水の大切さを学ぶ

海洋資源・陸上資源の保全を目指す

繰り返し上演することで、
自然とともに日本の伝統を継承していく願い

「水の輪」は、水の都・大阪で生まれた新しい能の作品です。

水の浄化をテーマに、環境問題について子ども達と一緒に考え、日本を代表する伝統芸能である能の力で水の環境保全を目指し、「Noh for SDGs」として「海の豊かさを守る」ために活動を続けています。

「水の輪」は、平成21年に、官民一体となって52日間開催された「水都大阪2009」の最終日を彩るイベントとして、当時新しく整備された天満橋・八軒家浜で制作・初演しました。以来、中央公会堂、中之島GATE、大阪城など水にまつわる大阪の都市空間や、淀川の源流の近江八幡/八幡堀、小豆島、屋久島、隠岐の島、岩手県・大船渡市、そしてブルガリアなど世界各地で「水を大切にする気持ち」を伝えてきました。大阪の子ども達と、そして、日本各地の子ども達、さらに外国の子ども達と一緒に水環境について考えてきました。2019年には、百舌鳥・古市古墳群の世界文化遺産登録を記念して津堂城山古墳で、コロナ禍でも感染拡大防止につとめながら、水無瀬神宮や八軒家浜、大阪国際会議場（グランキューブ大阪）等で上演し、活動を続けてきました。

水は絶えず世界を循環し、水鳥たちは県境や国境を超えて自由に世界中を旅します。これからも命の能「水の輪」をたくさんの場所で現地の子ども達と一緒に上演することで、水の都・大阪から「水を大切にする気持ち」で世界が1つになって、次の世代に豊かな水を伝えていければと願っています。

あらすじ

昔々、京都を都（みやこ）、大阪を難波（なにわ）と呼んでいた頃のお話です。都に住む男の人（ワキ）が難波に向けて出発します。途中、山崎のあたりまで来ると、淀川に女の人（前シテ）の漕ぐ一隻の舟が現れます。男の人は自分が難波を目指していることを伝えて、乗せてもらうことにします。

女の人は、昔の淀川の美しい様子を話しますが、難波の近くまで来ると様子がみるみる変わり、水が汚れてしまったことを悲しみ、このような水辺にいることができなくなったと言って、姿を消してしまいます。

男の人が一人で佇んでいると、そこに一羽の水鳥（アイ）が飛んで来て今の出来事を話します。水鳥はその女の人は昔淀川に住んでいた水神だろうといい、水が汚れてしまったのでいなくなってしまったことを話し、もう一度水神に帰ってきてもらうために、仲間を集め、掃除を始めます。（水鳥たちの舞・小学生）

やがて、綺麗になった川に龍神（ツレ）が現れ、きれいな流れの道を作り、波を沈めて待っていると、水神（後シテ）も現れて、みんなの努力で水が綺麗に蘇ったことを喜びます。さらに薬の精である猩々（ツレ）も現れて、最後は皆で水のありがたさと、難波（大阪）の栄えている様子を寿ぐのでした。

※物語の中に出てくる地名を変えることで、世界中のあらゆる地域のお話として上演することが可能です。

水都大阪
2009
で初演！

2009年10月12日

会場：天満橋 八軒家浜・特設船上ステージ

大阪で52日間開催された「水都大阪 2009」の閉幕を彩るイベントとして制作・初演、一般公募の小学生27名が水鳥になって出演しました。ごみ袋やブルーシートを子ども達の衣装や舞台美術に使用して作品を作り上げました。子ども達は船に乗って大阪の川の歴史を学び、船の上で能の謡を稽古し、公演に臨みました。

水鳥に国境はなく、水はたえず世界を循環しています。

「水の輪」のあゆみ

ブルガリア共和国

2011年11月18日
会場：ソフィア劇場（ソフィア市）
ブルガリアの小学生26人が「大阪ことば」で出演しました。日本の「絞り染め」の技法で自分たちの衣装を制作しました。

2012年8月16日
会場：ソフィア市アートセンター
環境問題について考えるアートセンターの森の中の野外舞台で開催しました。

2015年10月10日
会場：堂島リバーフォーラム
ミズベリング世界会議 IN OSAKA にて開催しました。

2016年11月4日
会場：グランフロント大阪 ナレッジプラザ
大阪の玄関口であるグランフロント大阪で、外国人の子ども達が母国語で出演する公演を開催しました。

2022年8月20日
会場：川の駅はちけんや 特設ステージ
水都大阪コンソーシアムによる「プラゴミで船を走らせよう」の事業と連携し、子供たちは美術家の指導の下、プラゴミを使用した衣装を制作し、出演しました。

2009年10月12日
会場：八軒家浜 特設船上ステージ
「水都大阪2009」で初演！

岩手県

2018年8月16日
会場：越喜来漁港 特設ステージ
（岩手県大船渡市）
越喜来漁港で開催される「三陸港まつり」に、地元に伝わる郷土芸能である「浦浜念仏剣舞」の稽古を重ねるこども達が出演し、三陸の海の美しさを発信しました。

滋賀県

2011年9月18日
会場：八幡堀 特設水上ステージ
（滋賀県近江八幡市）
淀川の源流である琵琶湖の八幡堀で子どもたち17人と一緒に上演しました。

2011年8月28日
会場：大阪城 西の丸庭園
「大阪城　城灯りの景」にて、大阪城を背景に上演しました。

島根県

2016年2月22日
会場：ノアホール（島根県西ノ島）
隠岐の島の名産であるイカ釣り漁のイカの墨を使い、子ども達が月をモチーフにした舞台美術を作り、「雪吊り」の老松の前で上演しました。

2022年3月18日
会場：グランキューブ大阪
（大阪府立国際会議場）
同年2月24日、ロシアによるウクライナ侵攻が始まりました。世界平和のため、出演する子ども達はウクライナカラーの衣装を自分たちで作り出演し、ウクライナ支援の募金を行いました。

2015年11月7日・8日
会場：中之島4丁目大阪市新美術館予定地
能楽、講談、クラシック音楽（フルート、バイオリン）、ポールパフォーマンスに よる新しい大阪ならではの公演。ヤナギミワ氏による美術作品のトレーラーの上で上演しました。

2009年12月26日
会場：大阪市中央公会堂
映像作家集団「新視覚」による琵琶湖から大阪までの川の流れの映像を投影しました。

2021年8月28日
会場：β本町橋
市民の手による新しい川の拠点「β本町橋」のオープニングで、地元住民約100人による参加型の公演で実施しました。

2016年11月21日・2017年10月2日
会場：NHKホール大阪
「水都を寿ぐ 交響楽能」として、能と交響楽のコラボレーションを実施しました。好評を博したため、翌年も再演しました。

藤井寺市

2019年9月16日
会場：津堂城山古墳 特設ステージ
（大阪府藤井寺市）
百舌鳥・古市古墳群が世界文化遺産になったことを記念して、子ども達と市民50人が参加しました。

2013年10月16日
会場：中之島GATE
大阪の新しい水の拠点として開発がすすむ「中之島 GATE」にて上演しました。

三島郡

2021年11月4日
会場：水無瀬神宮
（大阪府三島郡島本町）
境内には環境庁「日本名水100」に選ばれた「離宮の水」があり、天王山の麓の3つの川の合流点の風光明媚な地で「水を大切にする気持ち」を発信しました。

鹿児島県

2015年12月15日
会場：離島開発センター
（鹿児島県屋久島）
屋久島にしか生息しない動植物をモチーフに子ども達が生命の樹を制作しその前で上演しました。

香川県

2015年8月15日
会場：中山農村歌舞伎舞台
（香川県小豆郡小豆島町中山）
大阪と離島（小豆島、隠岐・西ノ島、屋久島）を「水を大切にする気持ち」でつなげる能の公演を実施しました。

2010年10月3日
会場：八軒家浜 リバービューウォーク
→雨天のため山本能楽堂に変更
外国人が水鳥になって英語・中国語・フランス語・韓国語で出演しました。

2011年10月30日
会場：山本能楽堂
世界的に活躍される照明デザイナーの藤本隆行氏と「光と照明による能舞台の陰翳」公演のシリーズとしてLED照明演出で上演しました。

2023年7月29日
会場：山本能楽堂
世界的に活躍されるバレエダンサーの針山愛美氏とバレエを学ぶ子ども達が水鳥になって上演しました。人気声優の山口由里子氏にナレーションでご参加いただきました。

2023年10月8日
会場：中之島公園芝生広場
→雨天のため山本能楽堂に変更

大阪でうまれた能は世界へ。「水を大切にする気持ち」で世界をひとつに。